

いもせやまおんなていきん

## 妹背山婦女庭訓

〔解説〕 明和八年（一七七二）大坂竹本座初演。近松半二らの合作で、全五段の時代物。当時衰退していた竹本

座がこの作品の大大たりにより盛り返したと言われるほど、人気のあつた作品です。物語は藤原鎌足親子による蘇我入鹿討伐を題材に、大和地方の伝説や謡曲、幸若舞曲などを取り入れ複雑な構成の大作となっています。

天智天皇の御代、蘇我入鹿は天皇派の藤原鎌足を失脚させ、自ら帝位につきます。入鹿は母が白い牝鹿の生血を飲んで生まれた為、超人的な能力を持っていましたが、爪黒の鹿の血と嫉妬に狂った女の血を混ぜ鹿笛に注いで吹くと、その力が失われるという宿命でもあり、ついにはその弱点を突かれて討伐されるのでした。

〔杉酒屋の段あらすじ〕 鎌足の子淡海（たんかい）は烏帽子折の求馬（もとめ）に姿を変え、三輪の杉酒屋の隣に住んでいました。杉酒屋の娘お三輪は求馬と恋仲になっていますが、求馬のもとに人目を忍んで橘姫が尋ねて来ます。

お三輪はそのことを丁稚の子太郎から聞いて、求馬の不実を責めますが、求馬はうまく言い逃れをします。お三輪は二人の仲を誓うため、七夕に祀ってあつた紅白の苧環（おだまき）の、赤い方を求馬に渡します。そこへ橘姫がやってきて、お三輪と橘姫が求馬を取り合い、さらにお三輪の母が帰ってきて、求馬（淡海）を捕まえようと騒ぎになります。

## 杉酒屋の段

てこそ出でて行く。

日とともに宮むさまも入相の、四方の市庫戸ざし時。

子太郎跡を打見やり、灯を上げ表の戸、夜の構への  
そこごと、こなたの道より歩みよる振りの袖の香や

ごとなき、面を隠す衣かづき誰れ白絹のやさ姿。窺

ふうちに隣りの軒。知らせのしはぶき、主の求馬

「今宵はどうしてはやりし。サア〜こちへ」

とその跡は云はず語らず手を取って、戸口立寄せ入  
る跡に子太郎は不審顔。隣りの門口耳をあて、聞き

すまして立戻り、

「なんでも隣の烏帽子めはおれとは違うてよっぽど

えらい色事師ぢやわい。あいつが見事な烏帽子でア

ノしろもの占めをると聞えた。こちらのお娘に聞か

せたら。たいていのことぢやあるまい。エ、はし早  
い奴ではある」

とつぶやくところへ、娘のお三輪、寺子屋戻り、足は  
やに門口這入れば、

「やお三輪様戻らんしたか。サア〜ことぢや〜  
大事ぢやわいの。こちの内儀様は家主殿へ用があつ

ていかしやつた。その跡へなんぢやか知らぬが、真

白な絹をかつぎ、幽霊かと思つたら、美しい術妻が

隣りの門口こと〜と叩いた。そしたら求馬様がつ

つと出て、『ようはやう来たナア』と、手に手を取つ

てうちへはいった。」

「そんならなんと云やる。求馬様の所へ美しい女中

様が見えて、その女中様を連立つて這入らしやんし

たと云やるのか」

「アイ」

「そりやマア合点のいかぬこと。幸ひかか様も留守なれば、そなた往て求馬様をここへ連れて戻つても」

「オット合点、呑み込んだ」

と走り出でて隣りの門、破れるばかりに打ち叩き、

「コレ求馬様、隣りの酒屋から使ひに来た。今のが済んだら印判持つてござんせ」

と口から出次第、求馬はびつくり、『なにやらん』と立出づれば、ものをも云はず、

「マア〜こちへ」

と無理やりに手を引連れてわが家のうち。それと見るより娘のお三輪、口に云はねど赤らむ顔。

「求馬様お帰りなされたか」

「ホこれは〜お三輪様。寺屋へお出でなさつたげな」

と互ひに味な墨付きを、子太郎がひつ取つて、

「サア〜おれが役はもうこれまで、そこへなにかの立引きさんせ。ここらでわれら粹をとほし夜食の扶持にありつかふ。兩人ともエヘン、ソモのちに逢はう」

と納戸へ走り入りにける。跡に二人は接穂なく、おぼこ育ちの娘気に思ひ詰めたる一節を、云はうとすれば胸迫り、

「いま子太郎に問いたれば、美しい女中様が宵からお前へ来てぢやげな。定めてそれは隠し妻。これまでお前とわたしが仲、逢うことさへもたま〜に、千年も万年も変らぬ契りと仰しやつたその約束は偽りか。浮世の訳も弁へぬ在所育ちのわたしでも云ひ交したことを忘れはせぬ。あんまりむごい」

と取り付いて、涙先立つ恨み言。

「これは思ひも寄らぬ疑ひ。なる程女中は来ているが、あれはソレ春日の神子殿。その連合ひ禰宜殿の烏帽子をあつらへに見えたのぢや。美女はおるか、いかな天女が影向あつてもほかへ散る心はない。和歌三神を誓ひにかけ偽りはもうさぬ」

と時の間に合ひ落付かせば、さすがおぼこの解けやすく、

「神様まで誓言に、それでわたしも落付いた。必ず変つて下さんすな」

と立上つて、七夕に供へ祭りし二つのおだ巻。持出でて前に置き、

「わたしが寺屋にいた時にお師匠様に聞いて置いた。殿御の心の変らぬやうに星様を祈るには白い糸、赤い糸、おだ巻に針を付け結び合はせて祭るとやら」

「オ、それがすなはち願ひ糸の乞巧針」

「ムお前もよう知つてぢやナア。白い糸は殿御と定め、女子の方は赤い糸。それで私もこの願籠め寺屋で見た本の中に、心をかけし女の歌。ア、なんとやら、オ、それよ『恋ひ渡る、思ひはちぢに結ばれて、幾夜願ひの糸の緒環』「ホ、その男の返しには『見えての、のちも願ひの糸筋を、よそへ乱すな君が小田巻』」

「アイ、さうでござんした。いつまでも変らぬし、赤い糸をお前に渡し、白い糸を私が持ち、契りも長き願ひの糸。夫婦の約束星合ひにかささぎならぬ小田巻を千代のなかだち取りかはし、肌につ合ふわりなきゑにし」

求馬がうちより以前の女、歩み出でてこなたの門口。「隣の烏帽子折様はこなたへ来てござるかな。許さっしやれ」

とうちへ入る。姿に求馬は手持ち不沙汰。お三輪は  
なんの気も付かず、

「ア、あなたがいまのお人かえ」

「オイノあれ／＼神子様ぢや。それで薄衣着てござ  
る。ナアもうし、お前様はアノお連合ひ様の烏帽子  
をあつらへにお出でなされましたのぢやナア。さう  
でござりませうがな。サ、／＼さうでござります」  
と紛らかす。包む詞の絹を漏る、月の笑顔をぴんと  
すね、

「コレもうし求馬様。あの女中はお端女か、なに人  
でござります」

「アノこれはこの酒屋の娘御」

「ム、そのマア隣りの娘御と最前から久しい間、な  
んの用がござりました」

と問はれて求馬は答へもなく、うぢつく素振り、見

て取るお三輪。

「ア、もうし、コレ神子様とやらいふ女中様。人を  
マアお端女かのなんのとひっこなしたものの云ひや  
う。求馬様にはアイ、私が用がたあんどござんす。お  
前のお世話にはなるまいし、構うて下さんすな」  
「オ、これははしたない。そのやうに云はしやつて  
も、そもじなどの用を聞く求馬様ぢやないわいなう。  
サアお帰り」

と手を取れば、お三輪が隔てて、

「イエ／＼／＼、わたしがまだ用がある。いなすこ  
とはなりません」

「イイヤここには置きはせぬ。邪魔せずとそこ通し  
や」

と、手を引つ立てて立出づれば、

「イヤ離さじ」

とお三輪もまた、あなたへ引けば、こなたへ引く、訳も渚にたはれる雁、つばさ振り袖ふり分け姿。恋を争ふ、その折からいきせき戻るこの家の母。

「ヤア求馬殿。こなさんには用がある。どっこへも遣ることならぬ。動くまいぞ」

と身構へに、なにかは知らず白絹の姫は外へと出で行くを、とめる求馬に、またすがる娘を、押分け母親は、

「求馬やらじ」

と引止め繋ぐ手と手を、しがらみの風に揉まるる争ひに、子太郎立出で見廻して、『これ幸ひ』と母親の帯にしつかりくくつたる縄先を、桶の呑み口にゆひ付け納戸へ逃げて入る。こなたは互ひに恋ひ慕ひ姿乱るる姫百合の、手を振りきれば、一時に乱れて走るを、母親が、『遣らじ』と追へば繋ぎ縄、力む拍手

に呑み口抜け酒は滝津瀬びつくり敗亡三人門へ遅れ  
じと、同じ思ひを跡やさき、道を慕うて

(追うて行く)

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。